

「京都府総合計画」南丹地域振興計画
(中間案)

京都府南丹広域振興局

<目 次>

1	計画の特徴	4 5
2	地域の将来像（20年後に実現したい姿）	
	（1）地域特性	4 8
	（2）めざすべき将来像	4 9
3	施策の基本方向（基本的な視点、4年間の対応方向）	
	（1）京都丹波の地域資源を生かした観光や移住・定住の推進による 交流・活力のまちづくり	5 1
	ア 豊かな自然・歴史文化や食、木材など京都丹波ブランドの更なる魅力発信	
	イ スポーツ資源を生かしたまちの賑わいづくり	
	ウ オール京都丹波による移住・定住の取組推進	
	（2）人権が尊重され、子育てしやすく、誰もが希望を持って元気に暮らせる地域づくり	5 8
	ア 「子育て環境日本一」の京都丹波の実現	
	イ 女性や高齢者、障害者等誰もが生き生きと暮らせる地域づくり	
	ウ 地域資源等を生かした健康長寿の地域づくり	
	（3）明日の京都丹波産業を担う人づくり	6 4
	ア 教育機関や地元企業、関係団体等と連携・協働した人材育成・確保	
	イ 特色ある高等教育機関の集積や立地条件を生かした商工業振興	
	ウ 京都丹波ブランドを支える特産農産物等の生産拡大・品質向上	
	（4）交流と安心・安全の基盤づくり	6 8
	ア 京都縦貫自動車道からのアクセス道路の整備促進	
	イ 桂川等の河川整備など災害対策の推進	
	ウ 暮らしの安心まちづくりの推進	
4	京都丹波の強みを生かす「横断プロジェクト」	7 4
	（1）京都丹波『食』プロジェクト	
	（2）京都丹波『自然・歴史文化』プロジェクト	
	（3）京都丹波『スポーツ』プロジェクト	
5	広域連携プロジェクト（エリア版）	7 6
	数値目標	7 8

1 計画の特徴

■「京都丹波」を、地域を象徴するブランドとして掲げた計画です。

- この計画は、南丹広域振興局管内の地域の魅力を広く発信し、活力ある地域を創ることを目的としています。
- 南丹地域のすばらしさを地域の内外に伝えるためには、地域の一体性を高め、地域全体の力を結集することが大切です。このため、この計画においては、南丹地域の2市1町のエリアを指す名称として、「京都丹波」を使用し、「京都丹波」ブランドを確立して発信していくこととしています。
- 京都丹波という名称には、『京都』と『丹波』の双方の歴史や伝統文化、美しい自然や豊かな農林水畜産物等の地域資源を生かして、活力と魅力にあふれ、次世代を担う若者が夢と誇りを持てる地域づくりを進めたいという強い思いが込められています。
- また、京都府では、府域を四つのエリアに分け、「もうひとつの京都」として、広域観光プロジェクトを進めるなど観光振興に取り組んでおり、ここ京都丹波は、「森の京都」エリアに位置付けられています。
- こうした森の京都の取組と連携させて京都丹波を打ち出すことで、京都丹波の名称がイベント名や広報誌等で使用されるようになりましたが、全国的にはまだまだ認知度が低いことから、今後、更に京都丹波ブランドの魅力発信を進めることにより地域のイメージを浸透させ、多くの人をこの地域に呼び込み、賑わいづくりに努めていきたいと考えています。

■京都丹波の強みを生かす「プロジェクト」を設定し、オール京都丹波で施策を横断的に推進していく計画です。

- 京都丹波には、質の良い「食」、豊かな「自然・歴史文化」、自然や地形を生かした「スポーツ」など、キラリと光る地域資源があり、それがこの地域の強みとなっています。これら三つの強みは、地域振興のためのいろいろな分野と関わりを有しています。
 - この計画では、各分野の具体的施策に、「食」、「自然・歴史文化」、「スポーツ」という京都丹波の強みを生かすこととし、地域課題を解決する新たな取組等となる施策をこれら三つの強みの視点から再編した「横断プロジェクト」を設定しました。
 - この計画の実施に当たっては、多様な主体が連携しながら地域全体で取り組んでいくことが重要です。このため、地域住民や市町、NPO等地域活動団体、企業、有識者等に参画いただき、オール京都丹波で議論・検討して取り組むことで、より効果的で広がりのある施策を展開したいと考えています。
- 分野ごとの各施策を、京都丹波の強みを生かすという視点で再構成することで、思わぬ“化学反応”が起こり、これまでにない発想での取組が広がり、地域の活性化や交流拡大につながっていくと考えています。

<横断プロジェクトの概要>

▶京都丹波『食』プロジェクト

京都丹波は、京の台所を支えてきた食の宝庫であり、府内の京のブランド産品（農産物）出荷額が府内の約4割、畜産物産出額（推計）が府内の約6割を占める地域です。本プロジェクトでは、「食」を活用した施策の広がり、「食の京都」との相乗効果が生まれる様々な取組を展開します。

- ・京都丹波のいちおし食材等をブラッシュアップし、イベントや観光コースに取り込むことにより「食」を目的とした京都丹波への誘客を促進
- ・障害者の社会参画促進と農業の人手不足を補う「農福連携」
- ・京都丹波ならではの食や農作業体験を取り入れた田舎暮らし体験ツアーによる「移住促進」
- ・学校給食に地元産食材を導入することによる「地産地消」や「食育推進」
- ・捕獲した有害鳥獣のジビエへの活用や鮎のブランド化など、豊かな食材を活用した新商品開発

▶京都丹波『自然・歴史文化』プロジェクト

京都丹波は、森林面積が82%を超える自然豊かな地域であり、また、伝統ある郷土文化や芸能などの文化財等を数多く受け継いでいる地域です。本プロジェクトでは、そうした豊かな自然や多くの文化財を保全・保存しながら、「自然・歴史文化」を活用した施策の広がり、相乗効果が生まれる様々な取組を展開します。

- ・豊かな自然・歴史文化を取り入れたウォーキングコースの普及による「健康増進」
- ・京都丹波の自然を体感できるセミナー等の開催による「森の京都・京都丹波ライフスタイルの発信」、「移住・定住の促進」
- ・地域の魅力を学ぶ講座の開催や地域学芸員・語り部の養成による「郷土愛の醸成」

▶京都丹波『スポーツ』プロジェクト

京都丹波では、地域の資源を生かし、トップアスリートの育成とスポーツのメッカづくり、スポーツをする・みる・ささえる地域の体制づくり、地域住民の健康づくりを推進しており、今後は、スポーツ・健康の関連企業の集積や研究の促進を図り、経済活動とのつながりをより強化するよう取組を進めます。また、令和2（2020）年にオープンした京都スタジアムが新たな地域のスポーツや交流の拠点となるとともに、自然の地形を生かしたアウトドアスポーツが盛んで、全国規模のトライアスロン大会が開催されているほか、ワールドマスターズゲームズ関西やアジア競技大会愛知・名古屋大会（サッカー競技）の開催も予定されています。本プロジェクトでは、「スポーツ」を活用した施策の広がり、相乗効果が生まれる様々な取組を展開します。

- ・京都スタジアムや京都トレーニングセンターにおけるスポーツ体験等を通じた「“京都丹波ファン”の拡大」
- ・京都スタジアムをゲートウェイとした「周遊・滞在型観光の推進」
- ・京都トレーニングセンターと大学等との連携による「トップアスリートの発掘・育成」と、全ての年齢層が気軽に参加できるスポーツ体験を通じた「体力づくり・健康づくり」

- ・大会・合宿等の誘致、宿泊調整、ボランティア調整などの受入体制づくり

2 地域の将来像（20年後に実現したい姿）

(1) 地域特性

○京都スタジアムなどの交流拠点が整備

近年、京都縦貫自動車道が全線開通するとともに、京都トレーニングセンター、京都丹波高原国定公園ビジターセンター、京都スタジアム、川の駅・亀岡水辺公園など、大規模な交流基盤が整備されています。

○京都先端科学大学など高等教育機関が集積、企業立地も進展

環境やものづくり、建築、医療等様々な専門分野にわたり特色ある大学や大学校等が集積しており、また、京阪神地域等へのアクセスの良さを背景に、高い技術力を有する多種多様なものづくり企業の立地も順調に進展しています。さらに、産学公連携による人材育成、食や農の分野における産業イノベーション等を進めるため、京都先端科学大学に「オープンイノベーションセンター・亀岡」が設置されます。

○京のブランド産品など特色ある農産物や畜産物、木材の高いシェアを誇る地域

京都丹波は、古くから京の台所を支えてきた食の宝庫であり、京のブランド産品（農産物）出荷額が府内の約4割、畜産物産出額（推計）が府内の約6割を占めています。また、京の都の木材を供給してきた地域であり、素材生産量も府内の約4割を占めています。

○大都市に近接しているながら豊かな森や田園風景に恵まれた自然環境

京都丹波は、大都市に近接し、京都市内への通勤通学者も多く、高い利便性を有しながらも、豊かな森林や田園風景に恵まれ、森の京都の魅力が詰まった地域です。

○Iターンを中心に近年移住者が増加

JR山陰本線（嵯峨野線）や京都縦貫自動車道等の交通網整備による利便性の向上と、これに伴う企業立地の進展により、近年移住者が増加しています。

○京都府域の中央に位置し、府中部と京阪神地域を結ぶ交通の要衝

古くから、府中部と京阪神地域を結ぶ交通の要衝としての役割を担っており、近年では京都縦貫自動車道に加え、大阪府、兵庫県に至る道路網の整備が進められている地域です。

○近年台風や豪雨等による自然災害が多発

桂川の上流域では、過去に氾濫が繰り返され、多くの被害をもたらした歴史があります。日吉ダム completionにより、治水安全度が飛躍的に向上しましたが、近年でも、台風や豪雨などの自然災害が多発しており、住民の防災に対する意識が高い地域です。

(2)めざすべき将来像

～来てよし・観てよし・住んでよし

交流人口・関係人口1,000万人超の賑わいと活気のある京都丹波～

コロナ禍による生活様式の変化に伴い、価値観やニーズが一層多様化しています。そうした価値観やニーズの多様化に対応し、都市近郊にありながら、自然環境に恵まれた地域特性、強みを生かして、京都丹波においては、次のとおり20年後に実現したい姿を考えています。

○京都スタジアムを核に交流人口・関係人口が拡大し、賑わいが創出されている地域

コロナ禍により地域への観光客が減少する一方で、暮らし方や働き方が多様化する中、京都丹波地域を訪れ、様々な形態で関わる人々を拡大し、交流人口・関係人口1,000万人超の賑わいと活気のある地域を実現することをめざします。

このため、京都丹波の魅力ブラッシュアップし、国内のみならず世界に発信・浸透させることにより、多くの人々がその魅力に触れてみたいと思える『観てよし』の京都丹波を実現します。

また、京都スタジアムが、府中北部と京都市・府南部地域を結ぶゲートウェイとなり、この地域を多くの人々が訪れ、周遊・滞在する中で魅力を感じられる『来てよし』の京都丹波づくりを進めていきます。

○食、自然・歴史文化、スポーツなどの京都丹波の強みを生かして、誰もが健康で生き生きと、安心・安全に暮らしている地域

京都丹波の豊かな食、美しい自然環境や歴史文化、京都スタジアムや京都トレーニングセンター等のスポーツ資源を活用して、地域住民の生涯にわたる健康づくりを推進するとともに、女性や高齢者、障害者等誰もが能力を発揮でき、住み続けたいと実感できる共生の京都丹波づくりを進めていきます。

また、河川改修等を計画的に進め、災害のリスクを軽減するとともに、NPO等地域活動団体などと協働して、住民一人ひとりの防災意識を高めることにより、安心・安全な『住んでよし』の京都丹波づくりを進めていきます。

○「森の京都・京都丹波ライフスタイル」が浸透し、若者の定着が進んでいる地域

都会に近いというこの地域の特徴を生かし、企業の立地を進めるとともに、農林水産業の収益性の向上や製品のブランド化を図り、産業の活力を生み出す京都丹波をめざします。

併せて、地域全体で子育てに取り組む「子育て文化」が浸透した京都丹波をめざします。

就労や子育ての環境整備を図り、移住・定住を促進するとともに、豊かな食や自然・歴史文化、スポーツを生かしたライフスタイルの浸透を図ることにより、若者を中心に、京都丹波で生まれ育った人も、新たに移り住んできた人も、誰もがずっと住み続けたいと思える『住んでよし』の京都丹波づくりを進めていきます。

3 施策の基本方向（4年間の対応方向）

新興感染症や物価変動など社会情勢の変化や、人口減少・少子高齢化、自然災害の頻発化・激甚化など深刻化する課題を踏まえ、京都丹波では、「めざすべき将来像」の実現に向け、「安心」・「温もり」・「ゆめ実現」を柱とする、温かい京都丹波づくりを推進していきます。

「安心」：府民の命と健康を守り抜き、府民に安心を実感していただける京都づくり

「温もり」：子どもや子育て世代を社会全体で見守り支えるなど、府民誰もが温もりを感じられる共生の京都づくり

「ゆめ実現」：温かさの源泉となる魅力や活力に満ちた、府民一人ひとりの夢が叶えられる京都づくり

【施策推進の基本的な視点】

○京都丹波の強みである「食」、「自然・歴史文化」、「スポーツ」を生かし、オール京都丹波で地域活性化と交流拡大を推進

良質の食材や農林水畜産物、豊かな自然や伝統ある文化、自然を生かしたアウトドアスポーツや京都スタジアムをはじめとするスポーツ資源等、京都丹波が持つ強みを生かすことを常に意識しながら、あらゆる主体と連携して、オール京都丹波で施策展開を図ります。

○人権が尊重され、誰もがその能力を発揮でき、住み続けたいと実感できる共生社会を構築

一人ひとりがお互いに相手の立場を理解し、思いやる心を持つとともに、人権が尊重され、女性や高齢者、障害者等をはじめ、誰もがその能力を発揮し、住み続けたいと実感できる「共生の京都丹波」を構築します。

(1) 京都丹波の地域資源を生かした観光や移住・定住の推進による交流・活 力のまちづくり

<基本的な考え方>

- 京都丹波には、豊かな里山などの自然環境・景観、伝統的な建造物、芸能、祭りなどの文化財、優れた食材や農林水畜産物等のキラリと光る地域資源が豊富にあります。また、京都縦貫自動車道や京都トレーニングセンター、京都丹波高原国定公園、京都スタジアム等、地域の活性化を支援、交流を促す基盤が整っています。
- また、京都サンガF.C.がJ1リーグに昇格したことに伴い、ホームゲーム観戦のため、全国から京都スタジアムへ多くの方が来訪しています。さらに、令和8(2026)年には、京都スタジアムでアジア競技大会愛知・名古屋大会のサッカー競技の開催、令和9(2027)年には、ワールドマスターズゲームズ関西が開催決定しており、京都スタジアムをはじめ管内のスポーツ施設を中心に、eスポーツやニュースポーツを含め、更なる賑わいの創出に取り組みます。
- 豊かな地域資源の保存・継承に取り組みつつ、森の京都DMOとの連携の下、地域の魅力を広く発信し、京都丹波ブランドを浸透させ、国内外・地域内外から来訪者を周遊・滞在型観光につなげ、地域の賑わいづくりに結び付く施策を積極的に展開します。
- 一方、少子高齢化や人口減少の著しい進展により、労働力人口の減少や地域コミュニティの担い手不足等が深刻になり、地域の活力の維持・発展が困難になるといった問題が顕在化しています。
- 今後、持続可能な地域づくりや地域の活性化を進めていくためには、地域外から人を呼び込む移住を促進するとともに、移住者や若者がいつまでもこの地域に住み続けたいと思える取組を進めることが必要です。
また、二地域居住やテレワークなど、働き方や地域との関わり方が多様化していることに対応し、多様な主体とともにまちづくりを支援する森の京都DMOとの連携を強化し、移住・定住の促進に取り組みます。
- 大都市に近く暮らしやすいという京都丹波の強みを生かし、多様なニーズに対応した移住・定住施策に取り組むとともに、移住者や関係人口が地域社会の担い手として活躍できる地域づくりに取り組みます。
併せて、若い世代が地域への愛着や誇りを持てるよう、地域の魅力を再認識する取組や、先輩移住者との交流など移住後のフォローアップにより、定住促進に取り組みます。

<現 状>

《観光入込客数・観光消費額》

- 京都丹波への観光入込客数、観光消費額は2019年までは概ね順調に増加しているが、2020年以降はコロナ禍により大幅に減少
 - ・観光入込客数：2019年 8,521千人 ⇒ 2021年 6,979千人 (年比較のため旧基準使用)
 - ・観光消費額：2019年 15,294百万円 ⇒ 2021年 10,286百万円 (年比較のため旧基準使用)

《地域資源》

○多くの観光客を惹きつける名所・旧跡、景観が存在

- ・ 国定公園：京都丹波高原
- ・ 日本風景街道：美山かやぶき由良里街道、西の鯖街道
- ・ 京都府景観資産：まほろば・亀岡かわひがし、琴滝
- ・ 京都の自然200選：保津峡、るり溪、質志鍾乳洞 他

○歴史的な行事や伝統芸能が数多く伝承

- ・ 亀岡市：亀岡祭山鉾行事、佐伯灯籠
- ・ 南丹市：田原の御田、田歌の神楽
- ・ 京丹波町：和知人形浄瑠璃、丹波八坂太鼓 他

《食》

○米、豆、野菜、畜産を中心とした府内有数の産地

- ・ 丹波産キヌヒカリ：3年連続「特A」を獲得（2016年度～2018年度）
- ・ 京のブランド産品（農産物）の出荷額
2020年度：府全体の42%（5.0億円）
- ・ 畜産物産出額
2020年：府全体の約60%（71.5億円）
- ・ 農産物直売所の販売金額
2015年度：21.6億円 ⇒ 2020年度：23.6億円（約1.1倍に増加）

《木材》

○京都丹波の森林面積は広大で、府内で最も林業の盛んな地域だが、近年生産活動は低迷

- ・ 南丹広域振興局管内総面積に占める森林面積の割合：82.5%
- ・ 府全域の森林面積に占める南丹広域振興局管内森林面積の割合：27.6%
- ・ 年間木材生産量
2015年：69,470m³ ⇒ 2020年：70,286m³（ほぼ横ばい）
- ・ 木材価格（ひのき中丸太価格）
2015年：17,600円/m³ ⇒ 2021年：25,900円/m³

《大規模な交流基盤施設》

○高速道路網の充実によりアクセスが飛躍的に向上し、スポーツや観光の振興に資する広域の集客施設が整備

- ・ 京都縦貫自動車道：2015年全線開通
- ・ 京都トレーニングセンター：2016年オープン
- ・ 京都丹波高原国定公園ビジターセンター：2018年オープン
- ・ 京都スタジアム：2020年オープン
- ・ 川の駅・亀岡水辺公園：2022年オープン

《スポーツ》

- 京都スタジアムをはじめとする施設整備により体験可能となった多様なスポーツ
 - ・スポーツクライミング、eスポーツ、ドローンサッカー、VRフィットネス、スケートボード 他
- 豊かな自然環境を生かした様々なアウトドアスポーツ
 - ・パラグライダー、ラフティング、サイクリング、ツリークライミング、カヌー、ボート、トレッキング、ウォーキング 他
- 地形を生かした大規模なスポーツ大会
 - ・京都亀岡ハーフマラソン（亀岡市）
 - ・京都丹波トライアスロン大会 i n 南丹、京都美山サイクルロードレース（南丹市）
 - ・京都丹波ロードレース大会、全京都車いす駅伝競走大会（京丹波町）
 - ・ジュニア全日本自転車競技選手権大会ロードレース（南丹市）
- 大規模な国際スポーツ大会
 - ・2026年アジア競技大会愛知・名古屋大会のサッカー競技（京都スタジアム）
 - ・2027年ワールドマスターズゲームズ関西

《移住・定住の促進》

○人口の推移

30年間で約3割減の見込み（府内：約15%減の見込み）（千人）

	2010年	2020年	2030年	2040年
南丹	143	130	115	98
府内	2,636	2,574	2,431	2,238

○生産年齢人口の推移

30年間でほぼ半減の見込み（府内：約27%減の見込み）（千人）

	2010年	2020年	2030年	2040年
南丹	89	72	59	47
府内	1,654	1,519	1,410	1,203

○京都丹波移住・定住促進協議会や移住コンシェルジュ等と連携し、移住・定住の取組により、移住者数は増加

・移住者数 2015年度：23人 ⇒ 2018年度：188人 ⇒ 2020年度：218人

《都市農村交流の促進》

○農家等への教育体験旅行の受入れ

・教育民泊受入数

2011年度：286人 ⇒ 2019年度：1,562人（約5.5倍に増加）

ア 豊かな自然・歴史文化や食、木材など京都丹波ブランドの更なる魅力発信

①京都丹波ブランドを全面に出したイメージ戦略を推進します。

1. 様々なイベント名や広報物等への積極的な「京都丹波」の名称使用と、ウェブサイト「京都丹波 京都のまんなか」からの情報発信により、京都丹波の地域ブランドをより一層普及・浸透させ、国内はもとより世界に向けて京都丹波を発信します。

② 京都丹波の豊かな地域資源を生かした賑わいづくりを推進します。

2. 都市部の家族連れやグループ、健康増進や癒やしを求める幅広い層に、京都丹波の魅力に触れ、地域のファンになってもらえるよう、京都スタジアムや京都トレーニングセンター等の施設活用とともに、地域の食、自然・歴史文化等をまるごと体験できるウェルネス体感型ツアーの取組を推進します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
3. 市町やNPO等地域活動団体、企業などとの連携により、食や自然・歴史文化、スポーツなど京都丹波の魅力を体感できるイベントを開催し、京都丹波の魅力を広く発信します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
4. 若者等多様な視点での京都丹波の自然、食、癒やし等の魅力あるコンテンツの発掘や、SNS等を活用してインバウンドも含めたターゲット層に向けて魅力を発信することなどにより、京都丹波ファン獲得をめざします。
5. 明治国際医療大学等健康づくりに知見のある大学や地域コーディネーター等との連携によるウェルネスプログラムの開発、及び、同プログラムの企業内活用促進により企業の健康経営を支援します。
6. 京都スタジアムや8つの道の駅等の観光・交流拠点において、プロモーション動画等を活用し、情報発信するとともに、これらの拠点施設と連携し、周遊・滞在型観光を推進します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
7. 市町の資料館や博物館等と連携して、住民自らが地域の魅力を再発見し、郷土愛の醸成につながる企画展や常設展の開催を促進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
8. 京都丹波全体を“野外博物館”と見立て、森の京都DMOや観光協会、商工関係団体等と連携して、交流拡大や地域振興の担い手となる“地域学芸員・語り部”を育成します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
9. イベントやメディアを通じた京都丹波のスイーツやグルメの情報発信により、いちおし食材等を魅力ある観光コンテンツとして育成し、京都丹波地域への「食」を目的とした観光誘客を促進することで、「地元での消費拡大」を進める「食の京都」の取組を推進します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』】
10. 里地・里山文化の発信拠点である京都丹波高原国定公園ビジターセンターや、芦生の森、美山かやぶきの里などの観光資源を生かし、森の京都DMOと連携して、食や森林浴、文化体験などを盛り込んだ新たな観光ルートや着地型旅行商品の開発、観光プロモーションを行います。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』】
11. 亀岡市や地元関係者等と連携し、川の駅・亀岡水辺公園を活用した教育旅行やアウトドア利用客の誘客に取り組むことで、アウトドアスポーツや観光を入り口とした活気ある地域づくりを推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』、『スポーツ』】

12. 大学ゼミ等と連携して若者等多様な視点から京都丹波地域の新たな観光資源を発掘し、森の京都DMOと連携しながら ICT 等オンラインを活用した情報発信や周遊・滞在型観光ツアーの造成・実施に取り組みます。
13. スタジアムをはじめとした交流施設や観光団体、関係事業者等と連携した観光情報の発信により周遊促進を図ります。
14. 京都丹波地域の文化財の保護、保全を支援するとともに、地域アートマネージャーや文化観光サポーター、地域の文化団体等と連携し、京都丹波の自然や歴史文化を生かしたアーティスト・イン・レジデンスの活動や、メタバース等のデジタル技術を活用した地域文化の継承支援や文化財活用による観光振興に取り組むなど、地域の活性化を推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
15. 地域内の高等教育機関に在籍する学生に京都丹波の魅力を知ってもらえるよう、講師派遣等により地域の歴史文化を学ぶ機会を創出するとともに、同窓会等を通じて地域情報を発信するなど、卒業後も地域への関心を持ち続けることができる取組を進めます。
16. 「保津川かわまちづくり計画」に基づき、保津川が有する広大な水辺空間を活用して、亀岡市と連携しながら芝生公園、河川管理用通路等、自然を感じつつ様々な交流・ふれあい活動ができる場を創出します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
17. 京都スタジアム周辺の道路について、亀岡市等と連携して歩行者空間の拡幅を行うことで、歩行者の利便増進やオープンカフェ等の利用を図り、地域活力の創出を推進します。

イ スポーツ資源を生かしたまちの賑わいづくり

18. 京都スタジアムに整備された e スポーツ施設等を活用した e スポーツ関連産業の創出、IT関連の人材育成等の取組を通じ、多様な人々を地域に呼び込むことで、スタジアムのゲートウェイ機能の強化、地域の賑わい創出を推進します。【横断プロジェクト『スポーツ』】
19. 京都スタジアムや丹波自然運動公園などを活用し、スポーツに親しめる場を提供することにより、健康づくりとスポーツの振興を進めます。また、京都トレーニングセンターを核として、国の機関や大学等との連携を図り、地域のジュニアアスリートを育成するとともに、質の高い練習環境や受入体制を構築し、エリア内に府内外のアスリートを呼び込みます。【横断プロジェクト『スポーツ』】
20. 京都丹波地域の魅力や歴史遺産等の地域資源等を活用した広域観光を、京都丹波観光協議会や大丹波連携推進協議会等と連携して推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
21. 京都スタジアムの集客機能を生かし、亀岡市等と連携して、地域住民の生活にも配慮しつつ、商店街の活性化や賑わいづくりなどを推進します。
22. 川の駅・亀岡水辺公園を環境学習やグリーンツーリズムの拠点として活用し、京都スタジアムをはじめとした周辺施設等との連携を図りながら、観光客の更なる周遊を促進します。
23. 京都舞鶴港や関西国際空港等を利用して京都市を訪れるインバウンド旅行者を京都丹波へ呼び込むため、京都府観光連盟や森の京都DMOと連携し、京都丹波観光協議会において海外向けのPRを行います。

24. 地域内の全ての市町が「京都サンガ・ホームタウン」であるという利点を生かし、少年サッカー教室の開催や地域のお祭りへの選手の参加等により、地域の交流や賑わいづくりを図ります。【横断プロジェクト『スポーツ』】
25. 国際大会や合宿、スポーツイベントの管内誘致に取り組むとともに、京都サンガF.C.の試合観戦に訪れた人たちに地域を周遊いただくために、アクティビティ等のコンテンツの拡充や地域資源を体感できる周遊ツアーの実施等を推進し、地域への新たな人の流れの創出に取り組みます。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
26. 国内外から多くのサイクリストに訪れていただくため、京都丹波地域を巡るサイクルイベントを開催し、「京都丹波サイクルルート」の認知度を高めるとともに、走行環境整備やサイクリストが地域の魅力を体感できる仕組みづくりに取り組みます。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』、『スポーツ』】
27. ワールドマスターズゲームズ関西やアジア競技大会愛知・名古屋大会のサッカー競技、京都丹波トライアスロン大会 in 南丹など世界規模のスポーツ大会の開催を捉え、商店街等と連携した地域の賑わいづくりに取り組むとともに、国内外から集まる参加者に地域の魅力を体感できる滞在プランを提案し、“京都丹波ファン”を増やします。【横断プロジェクト『スポーツ』】

ウ オール京都丹波による移住・定住の取組推進

28. 京都丹波移住・定住促進協議会と京都丹波中小企業支援Aチームが連携し、移住者への就労機会の提供に積極的に取り組む地域内の企業を「京都丹波移住者ウェルカム職場」として、企業の魅力や採用情報を一元的に情報誌やWebサイト等で発信します。
29. 30歳代でUターンを考えている人と先輩Uターン者との交流会を開催し、Uターンの不安や悩みに対してアドバイスを与えるグループワーク等を実施します。
30. 森の京都DMOと連携し、既移住者の暮らしぶりや移住のノウハウ、地域の魅力、京都丹波の自然、都市と田園がそれぞれ味わえる生活スタイル、副業など移住に必要な情報を発信するセミナーや相談会をオンラインも活用し開催します。
また、古民家再生を進めるとともに、教育体験旅行や移住お試し住宅で宿泊しながら、移住前の地域の暮らしを体験できるツアーなどを推進します。さらに、農業技術を身につけた移住希望者・定住者をおいしい食の応援隊開催地区で受入れ、農のある暮らしを支援します。【横断プロジェクト『食』、『自然・歴史文化』】
31. 海外から移住してきた外国人を支援するため、日本語学習や交流の場づくりなどに取り組んでいるNPO等地域活動団体の活動を、京都丹波パートナーシップセンターや市町等と連携して支援します。
32. 市町等と連携して移住希望者に提供できる空家の掘り起こしを進めます。
33. 学校の授業や地域住民等による地域学校協働活動を通じて地域の自然・歴史文化を学ぶ機会を充実させるとともに、子どもたちが京都丹波高原国定公園など豊かな自然を体感する機会や、佐伯灯籠、丹波八坂太鼓など地域の伝統文化を体験する場を設けることで、子どものうちから郷土愛を育み、若者の流出を抑え、Uターンを促します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】

34. 管内の高等教育機関の学生が、卒業後も第2のふるさととして京都丹波に関わり続けてもらえるよう、在学中に地域の豊かな自然や伝統文化を体感、体験する機会や、保護、継承といった地域活動に参加する機会を設けます。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】

(2) 人権が尊重され、子育てしやすく、誰もが希望を持って元気に暮らせる地域づくり

<基本的な考え方>

- 人と人とのつながりが希薄化し、子どもや子育て世代と社会との接点が減少しつつあることが言われる中、コロナ禍でそうした状況が更に深刻化しており、地域をはじめ社会全体で「子育て」を温かく見守り支え合うことの重要性がますます高まっています。
- 「子育て環境日本一」の実現をめざし、子育て支援団体、経済団体、関係行政機関等をはじめオール京都丹波で「子育て文化」の醸成を図り、「風土づくり」「まちづくり」「職場づくり」のそれぞれの取組を推進します。
- 地域が抱える様々な課題を解決していくためには、何よりもまず、一人ひとりの人権が尊重され、多様な主体が参画できる社会を形成することが必要です。近年、インターネット上の人権侵害やヘイトスピーチ、LGBT等性的少数者に関する問題、新型コロナウイルス感染症に関連した差別など、人権に関わる新たな課題が顕在化しており、引き続き、人権問題に対する啓発や相談体制の確保に取り組みます。
- また、地域活動の活性化を図るため、NPO等地域活動団体や地域住民等様々な主体の協働・連携や、自発的な活動を支援するとともに、誰もが能力を生かして暮らせる地域社会の実現をめざし、女性や高齢者等の交流の場の提供や障害者の生活支援・社会参画等を推進します。
- さらに、京都丹波では、高齢化が府全体を上回るスピードで進展しており、要介護認定者や認知症高齢者の増加に伴い、介護や在宅生活に関する問題が顕在化しています。このため、地域内の医療・介護・福祉の関係機関が連携し、地域包括ケアの取組を更に進めます。
- 併せて、誰もが健康に暮らせる地域の実現をめざし、京都丹波の豊かな自然環境や京都トレーニングセンターなどのスポーツ資源を生かした生涯にわたる健康づくりの取組を進めます。

<現 状>

《子育て支援対策の推進》

○出生数の推移

10年間で31.3%減（府内：22.6%減）（人）

	2010年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
南丹	1,059	889	832	825	749	728
府内	21,234	19,327	18,521	17,909	16,993	16,440

○子育てピアサポーター、子育て支援リーダーの育成の状況

- ・子育てピアサポーター83人、子育て支援リーダー229人（2021年度末）

○きょうと子ども食堂（2021年度補助対象）4箇所

○こどもの居場所（2021年度補助対象）2箇所

○きょうと子育て応援パスポート協賛店舗数 284店舗（2022年7月末）

○きょうと子育て応援施設数 61施設（2022年7月末）

《住民主体による地域づくり》

○地域交響プロジェクト交付金「重点課題対応プログラム」実施事業数（交付決定ベース）

2019年度：14件 ⇒ 2021年度年度：22件

《高齢化率の推移》

20年間で8.9ポイント増の見込み（府内：5.6ポイント増の見込み）

	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
南丹	32.7	34.9	36.7	38.5	41.6
府内	29.1	29.8	30.7	32.1	34.7

《要介護（要支援）認定率の推移》

10年間で4.4ポイント増の見込み（府内：7.2ポイント増の見込み）

	2020年度	2025年度	2030年度
南丹	17.3	19.3	21.7
府内	19.3	23.9	26.5

《65歳以上人口に占める認知症高齢者の割合の推移》

10年間で5.4ポイント増の見込み（府内：6.3ポイント増の見込み）

	2020年	2025年	2030年
南丹	17.8	20.0	23.2
府内	17.9	21.0	24.2

《健康づくり》

○府内平均を下回る日常の運動状況（出典：平成28年京都府民健康・栄養調査）

- ・日常生活における1日平均歩行数

2016年 南丹：6,310歩 府内：6,711歩

- ・運動習慣のある者（※）の割合 ※1回30分以上の運動を週2日以上実施し、1年以上継続している

2016年 南丹：34.3% 府内：37.4%

○目標を下回る食物・栄養素等の摂取状況（出典：平成28年京都府民健康・栄養調査）

- ・1日当たり野菜摂取目標350gに届かない者の割合（20歳以上）

2016年：男性70.8% 女性73.1%

- ・1日当たり食塩摂取目標 男性8g未満、女性7g未満に届かない者の割合（20歳以上）

2016年：男性74.2% 女性73.1%

ア 「子育て環境日本一」の京都丹波の実現

1. 子育て支援団体、経済団体、関係行政機関等で構成される「京都丹波子育て文化推進協議会」において、子育て支援に係る様々な課題を協議し、オール京都丹波で、この地域が子育てしやすい地域と実感できる取組を進めます。
2. 「WE ラブ赤ちゃんプロジェクト」の啓発・浸透や、きょうと子育て応援パスポートアプリ「まもっふ」、「きょうと子育て応援施設」の普及・利用拡大を図り、地域全体で子育てを温かく応援する気運を醸成します。
3. 地域子育て環境「見える化ツール」を活用し、地域の子育て環境の更なる充実に向けた課題解決を支援します。
4. 大学生が子どもたちと文化芸術や自然科学等に触れながら交流する機会等を通じ、子育てに対する夢や希望を育む意識を醸成します。
5. また、地域内の企業が、子育てに優しい職場づくりを進められるよう支援するとともに、子育て支援に積極的に取り組む企業を「京都丹波子育て支援企業」として周知します。
6. 小中高生が乳幼児とふれあい、命の大切さや子育て、自己のライフデザインに関心を持つ機会となる学習プログラムを普及します。また、京都丹波地域の子育て家庭の不安を軽減するとともに、地域において子育てしやすい環境を整え、地域全体で子育てを温かく見守り支える気運を醸成する「子育て応援フェスタ」を開催します。
7. 発達障害児支援の専門機関である花ノ木児童発達支援センターをはじめ、市町や関係機関と連携して、身近な療育機関で専門性の高い支援が受けられる体制を構築するとともに、発達障害児支援のネットワークを強化することにより、発達障害を持つ子どもとその家族が、安心して就学期を迎えられるよう支援します。また、不登校、ひきこもりなどの状態にある方について、それぞれの個性を理解し、例えば、コロナ禍において利用が拡大したオンラインを活用するなど、その方に合った社会参加を、NPO等地域活動団体と連携しながら、促進します。
8. 幼稚園・保育所・こども園や小中学校、企業、大学等と連携し、食いく先生等による農作業体験などの体験型食育や質の良い地元産食材を使用した学校給食における地産地消、望ましい食習慣の形成などにより、子どもたちが「食」や京都丹波の食文化や自然環境を大切にする気持ちを育みます。【横断プロジェクト『食』】
9. 「地域運動部活動推進事業」のモデル地域における成果と課題を踏まえ、部活動の円滑な地域移行に向け、市町と連携し、生徒にとって望ましい持続可能な部活動の構築を進めます。【横断プロジェクト『スポーツ』】
10. 豊かな自然に恵まれ、魅力ある歴史と伝統を受け継ぎ、スポーツが盛んという京都丹波の強みを子育てに生かし、子どもたちが京都丹波高原国定公園など豊かな自然を体感する機会や、佐伯灯籠、丹波八坂太鼓など地域の伝統文化を体験する場を設けるとともに、そうした機会を提供できる地域の伝統文化の担い手やスポーツ指導者等の確保・育成を支援します。また、各種スポーツ大会を通じて、子どもたちの体力づくりや健康づくりを進めます。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』『スポーツ』】

イ 女性や高齢者、障害者等誰もが生き生きと暮らせる地域づくり

①部落差別や、女性、障害者等に対する差別等、様々な人権問題の解決に向けた施策を推進します。

11. 部落差別や、女性、障害者等に対する差別、ヘイトスピーチ、LGBT等性的少数者の問題、新興感染症の感染者に対する差別など様々な人権課題に対して、人権強調月間や人権週間での街頭啓発、市町の実施する啓発事業への支援や、人権問題法律相談などにより、効果的な啓発や相談体制の確保に取り組みます。

②NPO等地域活動団体やボランティア等との協働による地域づくりを推進します。

12. 持続的な地域活動を進めるため、NPO等地域活動団体の交流会や地域活動に役立つセミナーの開催、地域内の多様な高等教育機関の学生による地域活動の促進など、市町と連携し、京都丹波パートナーシップセンターの取組を充実させます。
13. 住民主体の地域課題解決の取組を「地域交響プロジェクト交付金」により支援するとともに、介護予防や子育てなど、地域の支えが特に必要な取組については、「パートナーシップ・ミーティング」でのNPO等地域活動団体同士の意見交換等を通じて、ブラッシュアップを図ります。
14. ワールドマスターズゲームズ関西やアジア競技大会愛知・名古屋大会(サッカー競技)をはじめ、地域内で開催される全国規模のスポーツ大会等の運営に協力するボランティアが、これを機会に京都丹波の様々な地域活動にも関わってもらえるような仕組みづくりを進めます。【横断プロジェクト『スポーツ』】
15. 亀岡市の「セーフコミュニティ」の活動を支援するとともに、京都丹波全域に「セーフコミュニティ」の理念を広げ、安心・安全な地域づくりを進めます。
16. 通院・買い物等で高齢者の移動支援などに取り組むNPO等地域活動団体の活動を支援します。また、Maas (M o b i l i t y a s a S e r v i c e、出発地から目的地まで、利用者にとっての最適経路を提示するとともに、複数の交通手段やその他のサービスを含め、一括して提供するサービス)などの導入による地域内の移動・交通手段の確保を支援します。
17. NPOや地域活動団体等、多様な主体と連携し、子どもたちが地域の伝統文化に触れ、発信する機会を提供したり、高校や企業との協働により、子ども向けものづくり体験会を開催したりするなど、様々な文化体験や社会体験を通じた次世代の育成に取り組みます。
18. 京都丹波の子どもたちの作品を一堂に展示する「京都丹波美術工芸教育展」をはじめ芸術分野やスポーツ分野において校区や校種、年齢を超えた交流を行うことにより、次世代の地域づくりの担い手を育成します。【横断プロジェクト『スポーツ』】

③女性や高齢者が生き生きと暮らせるまちづくりを推進します。

19. 女性や高齢者が生き生きと暮らせるよう、行政とNPO等地域活動団体とのネットワークを構築し、就労やボランティア活動、スポーツ・文化活動、相談窓口などの情報や交流の場を提供します。
20. 女性や高齢者の「起業」のニーズを踏まえ、商工関係団体や地元金融機関等との協働による相談や研修会等の開催を通じた「起業」の支援を行います。

④障害者の生活支援・社会参画を推進します。

21. 農福連携の拠点であるきょうと農福連携センター中サテライトに技術的な支援を行うとともに、チャレンジ・アグリ認証を進めることにより、障害者の就労支援と収入の向上を図ります。また、福祉事業所等が丹波くり栽培など農業に参入する取組に対して、技術指導を実施します。【横断プロジェクト『食』】
22. 南丹圏域障害者総合相談支援センター「結丹」や障害児者総合支援ネットワーク「ほっとネット」を核として、障害者のライフステージ全般にわたる総合支援体制の充実を図り、障害者が住み慣れた地域で自立した生活を送れるよう支援します。
23. 障害者の収入増を図るため、オリジナルブランド「ぬくもり京都丹波」等の商品の販売促進を強化します。
24. みずのき美術館等が行う障害者による「アール・ブリュット」の創作・発表の場の提供や、丹波自然運動公園などの拠点機能を生かし、障害者の文化芸術やスポーツの振興に加え、障害のある人もない人も共に文化芸術やスポーツに親しめる「場づくり」等の機会を創出します。【横断プロジェクト『スポーツ』】

ウ 地域資源等を生かした健康長寿の地域づくり

①「健康の森プロジェクト」を推進します。

25. 子どもから高齢者まで気軽に参加でき、親しみやすいスポーツ・レクリエーション活動を含めた様々なスポーツを継続的に楽しめる総合型地域スポーツクラブの取組を支援し、体力づくり・健康づくりを推進します。【横断プロジェクト『スポーツ』】
26. 誰もが健康づくりに取り組めるよう、「森の京都を歩こう！京都丹波健康ウォーキングマップ」や「京都丹波サイクルルート」の情報を分かりやすく発信するとともに、各種イベントにおける体験ウォーキングの実施や健康出前講座でのコース紹介により普及を図るなど、森の京都の豊かな自然や歴史文化を生かした健康づくりを推進します。【横断プロジェクト『自然・歴史文化』】
27. 野菜たっぷり、減塩や低栄養予防に配慮した「なんたん・かんたん・やさい料理レシピ」を農産物直売所等で配布するとともに、ホームページにおいて普及啓発を行い、心疾患、腎疾患、糖尿病の予防を進めます。【横断プロジェクト『食』】
28. 住民主体の介護予防を推進するため、「なんたん元気づくり体操」や「お口の健康体操」、適切な栄養・食事の摂り方を普及し、総合的な健康づくりを進めます。

②京都式地域包括ケアを推進します。

29. がん、脳卒中、心筋梗塞等、主要な疾病に応じて、急性期から回復期、在宅療養に至るまで、切れ目なく医療が提供できるよう、地域医療支援病院である京都中部総合医療センターを軸にした圏域医療機関の医療分担を図り、地域の実情に即した広域的な地域医療連携体制の整備を進めます。
30. 認知症になっても本人の意思が尊重され、住み慣れた地域で安心して暮らせるように、市町が実施する認知症の本人や家族のニーズと認知症サポーターを中心とした支援とをつなぐ

仕組み（チームオレンジ）の立ち上げ支援など、多様な主体の参画による認知症総合対策や新型コロナウイルス感染症により休止を余儀なくされている認知症カフェ等の居場所について、オンラインを活用した開催方法の普及など、活動の再開・継続を支援します。

31. 医療従事者及び介護従事者等の人材の不足や偏在を解消するため、医療と介護・福祉分野を一体化した人材確保の取組を推進するとともに、市町が行う人材フェアの開催を支援します。
32. 介護・福祉の担い手を確保するため、京都丹波福祉職場応援プロジェクト促進会議を中心に、「FUKUSHI 就職フェア京都丹波」の開催や「京都丹波福祉職場ガイド」の運用をはじめ、新規採用職員交流会やキャリアアップ研修会の開催など、京都丹波地域の障害・高齢・児童関係事業所における人材の確保及び定着を図ります。
33. オール京都丹波で健康長寿や地域包括ケアを推進するため、「なんたん元気づくり体操」等を普及するとともに、地域の健康・介護に関するデータの分析結果等を提供し、市町の地域支援事業を支援します。

(3) 明日の京都丹波産業を担う人づくり

<基本的な考え方>

- 京都丹波は、京阪神地域等へのアクセスの良さを背景に、高い技術力を有する多種多様なものづくり企業が集積しており、農林水産業においてもブランド京野菜や畜産物の生産が盛んな地域です。また、地域内には様々な専門分野にわたる特色ある高等教育機関が数多く立地しており、産学公連携の取組が進みつつあります。
- 一方で、中小企業を中心に人材不足が一段と深刻化しています。また、農林水産業では、農家の減少や高齢化が進んでおり、新規就農者や後継者の確保・育成が最大の課題となっています。
- このような中、地元企業や地域のシルバー人材センター等の関係団体等と連携し、人材育成・活用を進めるとともに、省力化等をめざした生産工程の自動化等による人材不足の解消に取り組みます。

併せて、産学公連携や企業間のネットワークによりイノベーションを促進し、若者に魅力ある企業を育成します。

また、農林水産業でも、I o T等の先端技術導入による生産拡大や品質向上、ブランド化による販路拡大を進め、「儲かる産業」とすることで、就農意欲の向上を図るとともに、新規就農者の経営や、若手後継者の経営革新の支援を一層強化します。

なお、とりわけ人材不足が深刻な林業については、林業大学校や地元の林業事業体等とも連携し、森の京都推進の原動力となる林業の担い手育成と地元雇用の促進に取り組みます。

<現 状>

《ものづくり産業》

- 機械金属、電気・電子、食品等をはじめ多様な業種のものづくり企業が集積
- ・ 製造品出荷額等は増加傾向

2009年：2,583億円 ⇒ 2019年：3,509億円（35.8%増）

《高等教育機関》

- 多様な高等教育機関が集積
- ・ 4大学：京都先端科学大学、明治国際医療大学、京都医療科学大学、京都美術工芸大学
- ・ 4大学校等：京都伝統工芸大学校、京都建築大学校、林業大学校、公立南丹看護専門学校

《農林水産業》

- 農業従事者数は5年間で2割減少（10年間で4割）
- ・ 2010年：15,154人 ⇒ 2015年：11,206人 ⇒ 2020年：8,578人
- 米の相対取引価格が下落
- ・ 京都コシヒカリ（円/玄米60kg 税込み）
- 2015年：14,109円 ⇒ 2020年：15,763円
- ⇒ 2021年：13,840円
- 農業資材の価格が上昇

- ・農業生産資材価格指数（総合）

2015年：100 ⇒ 2021年：106.7（概数）

○林業労働者数は10年間で約5割減少

- ・2009年：219人 ⇒ 2019年：119人

○林業経営体は10年間で約8割減少

- ・2010年：1,136戸 ⇒ 2020年：258戸

○南丹管内家畜飼養者戸数は10年間で約5割減少

- ・2011年：373戸（南丹管内） ⇒ 2021年：174戸（南丹管内）

ア 教育機関や地元企業、関係団体等と連携・協働した人材育成・確保

1. 地域の企業や高等教育機関等との産学公連携を進め、AIやIoT等の先端技術に対応できる人材や、地域の農林水産資源を生かしたものづくり、伝統技術等を活用したものづくりなど様々な分野に関わる人材の育成・確保を支援します。
2. 京都丹波中小企業支援Aチームが地域内企業を訪問し、商品開発や販路開拓などの助言、人材育成などトータルな支援を一層進めます。
3. 南丹高等学校テクニカル工学系列と地元パートナー企業との連携を促進し、地域ぐるみでのものづくりを担う人材の育成、製造現場を支える技術・技能の伝承を支援します。また、管内の高校生が地元企業の魅力を知ることにより、地域への理解や定着を促進できる取組を支援します。
4. 京都先端科学大学に設置される「オープンイノベーションセンター・亀岡」による企業等の人材育成・リカレント教育との連携や、京都府生涯現役クリエイティブセンターが実施する、ミドル・シニア層から若者や女性へと拡大し全世代型で展開するリカレント教育を、管内の行政や関係機関等と連携し広く発信を行い、推進します。
5. 担い手が不足し今後の営農が危ぶまれる地域農業の維持・発展のため、集落営農組織や農企業者等が取り組む加工・販売や法人化の支援を進めるとともに、複数集落間の営農体制の組織化や就業者の育成・確保を支援します。
6. 大規模経営者から少量多品目栽培の新規就農者まで様々な農業経営体に対して、外食から中食・内食への生活様式の変化への対応など、それぞれのニーズに基づき、産業支援機関や企業等と連携した支援を行い、京都丹波の「食」の担い手として育成します。
7. GAPや農場HACCP、スマート農業の取組を支援するとともに、企業や農芸高等学校等との連携を図り、農業・農村の担い手となる人材を育成します。
8. 林業大学校と京都府立大学や北桑田高校、須知高校等大学・高校との連携強化やスマート林業（ICT技術等）等の最新技術を取り入れた授業により、高度な人材を育成するとともに、地元の森林組合や林業事業体と連携し合同企業説明会の開催やインターンシップの受入れを進めることにより、林業大学校で育成した担い手の地元雇用をさらに促進します。
9. 農林水産大臣賞を獲得した京都丹波産和牛の生産拡大や、畜産物の販路開拓、加工品開発など畜産の未来を担う企業的経営体の積極的な経営展開を促進し、育成するため、「京の畜産応援隊」と連携し中小企業経営者との交流会などを行います。

イ 特色ある高等教育機関の集積や立地条件を生かした商工業振興

10. 地域内の中小企業からなるネットワーク「京都丹波経営革新クラブ」等と、人材育成、食や農の分野における産業イノベーション等を目的に京都先端科学大学に設置される「オープンイノベーションセンター・亀岡」との連携やマッチングを促進して、産学公連携により、医療、伝統工芸、健康、スポーツ、バイオなどの様々な分野で、地域内企業の受注拡大や共同開発を支援します。
11. 高速道路網や企業集積を生かして、新たな商業施設や物流拠点等の整備を支援するとともに、多様な分野の企業誘致を進めて、継続的な地域内経済の好循環を作り出していきます。
12. 商店街創生センターと連携し、地域内の企業やまちづくり団体など多様な主体のネットワーク化を進め、地域住民がふれあえるコミュニティの場として商店街の振興を図ります。

ウ 京都丹波ブランドを支える特産農産物等の生産拡大・品質向上

13. 食味ランキングの特A獲得をめざす水稻や黒大豆、小豆、京野菜など日本を代表する京都丹波の農畜産物の生産拡大と品質向上を図るとともに、農作業の省力・軽労化を促進するため、スマート農業を推進します。また、これらの営農を展開するための基盤づくりとして、国営ほ場整備事業亀岡中部地区をはじめとした生産基盤整備による区画整理を推進し、担い手の経営を下支えします。
14. 環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律（みどりの食料システム法）に基づき、有機農業や京都こだわり生産認証システム・ICTなどの農業技術の普及促進や、産業支援機関と連携した販路開拓支援など環境負荷の低減に資する生産活動を促進します。
15. 丹波くりの振興を図るため、生産者の要となる中核的生産者（マイスター）を育成し、生産者のネットワークを構築して、地域のくり生産の活性化を図り、里山や休耕田及び耕作放棄地を利用した新規くり園づくりや新規参入を進めるとともに、生産基盤調査により収集した園地情報を基に、京都府丹波くり振興戦略会議を核として、長期振興ビジョンを樹立し、生産者団体、JA、市町と一体となった生産振興を図ります。【横断プロジェクト『食』】
16. ウッドショックを契機として国産材が見直されているものの林業を取り巻く情勢は依然不透明な中、林業の振興を図るため、大規模木造施設の建築が可能となる大断面集成材の加工施設の建設を支援し、地域産木材の利用拡大を促進するとともに、材料となる丸太を安定供給できるよう、森林組合等と連携して生産量の増加を図ります。また、CO2吸収などの森林の公益的機能の増進を図るため、間伐や皆伐・再造林などの循環型の森林整備を進めます。
17. 経営管理が行われていない森林の所有者と林業の担い手をつなぐシステムである「森林経営管理制度」の円滑な運用を図るため、仲介役となる市町や、森林組合等の林業事業体を支援し、適切な森林の管理と整備を促進するとともに、森林資源の活用拡大を図ります。
18. 未利用の間伐材や製材端材等を、チップや木質ペレット、薪として加工し、木質バイオマスエネルギーとして利用拡大を図るとともに、森林組合等から木質バイオマス発電所への未利用材の供給を推進します。

19. 京都丹波の内水面漁業の振興のため、市町等の関係機関と連携し、全国的に名高い“美山川の鮎”をはじめ、良質な鮎の増殖や販路の拡大を支援するとともに、観光資源として活用するために、効果的なPRを図ります。【横断プロジェクト『食』】
20. 畜産・耕種農家からなる「飼料用米生産利用推進研究会」の耕畜連携を支援するため、畜産センター、農業改良普及センター及び農林センターが連携して、飼料用米やWCS等の低コスト・多収栽培の研究・普及拡大に取り組むとともに、良質な堆肥を供給し、資源循環型の農業を促進します。
21. 森林組合等林業事業体、木材市場、木材加工流通業者、工務店など、川上から川下までの関係者の連携による新たなサプライチェーンの構築を支援し、地域産材利用の拡大を図ります。

(4) 交流と安心・安全の基盤づくり

<基本的な考え方>

- 京都丹波は面積が広大で山間地域が多く、地域の生活や地域産業を支えるためには、交通ネットワークの整備が必要です。

平成22(2010)年3月のJR山陰本線京都一園部間の複線化、平成27(2015)年7月の京都縦貫自動車道の全線開通等、鉄道と道路の整備により京阪神主要都市との交通の利便性は飛躍的に向上したところですが、地域内を結ぶ道路については、引き続き整備等を進めるとともに、JR山陰本線の利便性向上を含め、道路と鉄道が一体となった交通ネットワークの整備に取り組みます。

- また、近年、集中豪雨が多発し、毎年のように全国各地で洪水や土砂災害が発生していますが、京都丹波では、平成30(2018)年に平成30年7月豪雨をはじめ、相次ぐ台風等により、甚大な被害を受けました。

京都丹波では、広大な山間地域と桂川、由良川の一級河川を有することから、今後とも土地利用と一体となった河川改修等の流域治水の取組を計画的に進めるとともに、急傾斜地整備や治山事業の実施など、土砂災害防止対策の推進を図ります。

- 併せて、野生鳥獣被害をはじめ自然災害や感染症など、深刻化する様々な危機事象に適切に対応できるよう、市町の防災部門や警察、消防等と連携した取組に加え、住民一人ひとりが安心・安全の意識を高め、地域ぐるみで危機に備える取組を促し、安心・安全な京都丹波づくりを進めます。

さらに、市町やNPO等地域活動団体、地域住民等との協働により、里山を有効活用するとともに、土砂災害の防止や水源の涵養をはじめ、保健休養の場の提供、生物多様性の保全など森林の持つ多面的な機能に着目して、モデルフォレスト活動など豊かな自然環境の保全に取り組み、住みやすい京都丹波づくりを進めます。

<現 状>

《交通網の整備》

- ・2010年3月 JR山陰本線京都一園部間の複線化
- ・2013年4月 京都第二外環状道路完成
- ・2015年7月 京都縦貫自動車道全線開通
- ・2017年12月 新名神高速道路高槻一川西開通（箕面とどろみIC開設）

《河川の整備》

- 桂川上流圏域では、100年に1回の洪水に対応する日吉ダムの完成により、浸水被害の発生回数は減少したものの、近年の集中豪雨により、浸水面積・浸水戸数ともに大きな被害が生じている。

- ・2013年 台風18号：浸水戸数366戸、浸水面積282ha、園部川堤防決壊
- ・2018年 平成30年7月豪雨：閉亀川土砂災害など

《近年の主な危機事象》

- ・2003年5月 重症急性呼吸器症候群（SARS）

- ・ 2004年2月～4月 高病原性鳥インフルエンザ
- ・ 2004年10月 台風23号
- ・ 2013年9月 台風18号
- ・ 2014年8月 平成26年8月豪雨
- ・ 2017年10月 台風21号
- ・ 2018年7月 平成30年7月豪雨
- ・ 2018年9月 台風21号

ア 京都縦貫自動車道からのアクセス道路の整備促進

①京都丹波と大都市圏を結ぶ道路を整備します。

1. 阪神地域と亀岡市街地を結び、緊急輸送道路ネットワークを確保するとともに、地域産業の振興等に寄与する国道423号（法貴バイパス）の整備を推進します。
2. 緊急輸送道路ネットワークを確保するとともに、地域産業の振興等への寄与や大阪方面との交流拡大が期待できる枚方亀岡線及び茨木亀岡線の整備を検討します。
3. 京都市と亀岡市を結ぶバイパス等のネットワーク強化を促進します。

②京都丹波の交通ネットワークを整備して地域間の交流を促進します。

4. 京都縦貫自動車道八木東ICへのアクセス強化を図るとともに、地域振興に寄与する国道477号（西田大藪道路）の整備を推進します。
5. 交通量が多く慢性化している渋滞の緩和を図るため、国道9号の整備を促進するとともに、国道9号下矢田交差点までの枚方亀岡線の整備を推進します。
6. 幅員狭小で線形不良のため大型車の離合が困難となっている宮前千歳線、東掛小林線、綾部宮島線（肱谷バイパス）の整備を推進します。
7. 災害時等における孤立集落の発生を防止するとともに、広域的な交流拡大が期待できる国道162号、京都広河原美山線の整備を検討します。
8. 亀岡市川東地区と亀岡市街地を結び、地域振興にも寄与する亀岡園部線の整備を推進します。
9. 亀岡市街地の渋滞緩和に向け、都市計画道路である並河亀岡停車場線の整備を推進します。
10. 南丹市北部地域と南丹市街地を結び、地域振興にも寄与する園部平屋線の整備を推進します。
11. JR山陰本線沿線全体の公共交通サービスの改善に取り組むとともに、鉄道駅や主要バス停の乗継利便性や待合快適性の向上、ICカードのエリア拡大や普及等を促進します。
12. 鉄道とバス・タクシーの乗り継ぎ、キス&ライド等の利便性の向上を図ります。

イ 桂川等の河川整備など災害対策の推進

①治水安全度の向上に向けて河川整備を推進します。

「桂川上流圏域河川整備計画」に基づき、治水安全度の着実な向上を図ります。

13. 国が設置する淀川流域治水協議会及び由良川流域治水協議会において情報共有・意見交換しながら、「治水効果の見える化」を図ります。

14. 桂川の治水安全度を向上させるため、国による嵐山の左岸溢水対策の可動式止水壁整備とともに、亀岡では霞堤4箇所の高上げが完成し、上流、下流のバランスにも十分配慮しながら、河川整備を計画的かつ着実に進めており、引き続き、保津峡から日吉ダムまでの区間において、川底の地形を把握できる新技術のグリーンレーザー測量を実施するなど調査を推進します。
15. 園部川、千々川、東所川、雑水川、七谷川について、桂川改修との整合を確保しながら治水安全度の向上を図るため、河川改修事業を推進します。
16. 閉亀川について、土砂災害から住民の生命・財産を守るため、堰堤及び溪流保全工の新設を推進します。
17. 高屋川について、治水安全度の向上を図るため、浸水被害の軽減に向けて、護岸整備等の河川改修事業を推進します。
18. 篠原西一谷川、上乙見川、大町谷川、谷山川、菖蒲谷川について堰堤の新設を、園部川、津の本谷川について既存堰堤の改良を推進します。

②災害に強いまちづくりを推進します。

19. 劣化状況評価及び地震・豪雨耐性等評価の結果を踏まえ、老朽化したため池の改修や利用されなくなったため池の統廃合を行うとともに、ハザードマップの作成を進めるなど、市町と連携して災害の未然防止を図ります。
20. 激甚化する台風や集中豪雨により発生した甚大な森林災害に対応するため、被災箇所において治山事業を実施し、早期の森林復旧と人家・集落への土砂流出災害等の未然防止を図ります。また、小規模な森林災害に対しては、地域の協力を得て、流木等の危険木除去や集落へ流出する土砂の撤去を実施し、森林災害拡大の未然防止を図ります。
21. 平成30(2018)年の台風21号など、これまでにない記録的な暴風や積雪などの自然災害により農業用パイプハウスの倒壊被害が発生していることを踏まえ、倒壊防止のための補強や予防策の技術指導を行うとともに、農業共済制度や収入保険などセーフティネットへの加入について情報発信を進めます。
22. 土砂災害防止法に基づく2巡目以降の基礎調査の実施と土砂災害警戒区域等の指定を順次進めます。
23. 天引、穴人、内林町、平松の各地区について、急傾斜地等での崖崩れを防ぐ擁壁等の整備を推進します。
24. 台風や豪雨等に備え、日吉ダムと下流域自治体との情報伝達網の整備と情報伝達訓練を実施するとともに、南丹土木事務所が管理する70河川について、想定し得る最大規模の降雨に対応した浸水想定区域図を公表し、水害等に備えた自主防災組織の避難行動タイムラインの作成を支援します。
25. 雨量予測や地形データをもとに、6時間先までの河川の水位・氾濫区域を予測する「京都府水位・氾濫予測システム」を構築し、市町村による早期の避難情報の発令を支援します。
26. トンネル、橋りょうなど老朽化が進む各種インフラに対し、点検と補修による予防保全により、インフラの長寿命化を推進します。
27. 交差点や橋りょう、横断歩道、道路表示板、トンネル等の照明のLED化を推進し、交通安全の充実に図ります。

28. 工事説明会や見学会等を開催し、地域住民の意見を取り入れながら、道路や河川の整備を推進します。
29. 府民協働型インフラ保全事業を活用し、地域に暮らす住民の視点から、身近な安心・安全につながる小規模な工事及びインフラの劣化対策を推進します。
30. 小学校の授業で道路・河川等の役割の説明や、学校近くの工事現場の見学などを行い、小学生に公共施設の機能や重要性についての理解を深めてもらいます。
31. 各種防災イベントや出前語らいにより、土石流発生や木造住宅耐震施策を模型等で説明することで、防災知識を体感的に理解してもらいます。
32. 大規模盛土造成地の安全性を把握する調査を進めるとともに、宅地造成等規制法の一部を改正する法律として「宅地造成及び特定盛土等規制法（盛土規制法）」が公布されたことを踏まえ、関係部局が連携して法施行に向けた基礎調査や区域指定等を進めます。
33. 市町教育委員会・警察・道路管理者が連携して実施した通学路合同点検で、対策必要箇所として抽出された箇所において、歩道整備等の交通安全対策を推進します。
34. 地域防災リーダーの育成や防災教室等の開催により、大規模な災害から住民が助け合って身を守れるよう、地域防災力の向上を図ります。
35. 原子力災害に備え、市町や関係機関と連携した広域避難訓練の実施や避難路の整備を進め、広域避難計画の実効性を高めます。
36. 南丹地域災害医療連絡会の開催や災害医療訓練の実施により、災害時における南丹地域の医療体制の強化や、災害医療の人材育成等を図ります。
37. 災害時要配慮者の避難を円滑に行うため、市町における個別避難計画の作成を促進するとともに、医療的ケアが必要な難病患者や小児慢性特定疾病児童等の安全を守るため、自治会や民生委員・児童委員等支援関係者とともに関別の行動計画の策定を支援します。
38. 大規模災害時における避難先の確保に向け、流域ブロック単位での被害想定を踏まえ、様々な被災パターンを設定しながら、市町とともに広域避難マニュアルを作成し、災害時における地域間連携の仕組みを構築します。
39. 大規模災害に備え、大規模盛土造成地の安全性を把握するとともに、関係法令に基づく監視指導を強化します。

ウ 暮らしの安心まちづくりの推進

家畜伝染病対策をはじめ、様々な危機事象への迅速・的確な対策を講じるとともに、自然環境の保全を図り、安心・安全で住みやすい京都丹波をつくります。

① 家畜伝染病や有害鳥獣に対する備えを強化します。

40. 府内で最も畜産が盛んな地域であるため、豚熱や高病原性鳥インフルエンザ等を発生させないように、野生鳥獣の侵入防止など万全の衛生対策を指導します。また、発生時に必要な資材や人員などの防疫体制を整えるとともに、現地で初動防疫を実施するスターターチーム員の訓練などを実施して発生に備えます。
41. 野生鳥獣被害に遭っている集落に対し、府と市町、専門家等で組織する「野生鳥獣被害対策診断チーム」が聞き取り調査を行い、集落ごとに効果的な侵入防止柵の設置方法等の対策を示した「診断カルテ」を作成し、地域ぐるみでの対策の実施を促進します。

42. 市町や有害鳥獣捕獲班員と連携し、I C T捕獲檻の導入などにより捕獲者の負担軽減を図るとともに、集落の協力を得て捕獲水準を維持する地域ぐるみの捕獲に取り組みます。また、猟友会等による食肉処理加工施設の整備を支援し、狩猟から捕獲、ジビエの販売促進活動やペットフードへの活用など、総合的な対策を推進します。【横断プロジェクト『食』】

② 感染症対策を推進します。

43. 新型コロナウイルス感染症等新たな感染症への危機対策として、市町や医療機関等と連携を図りながら、感染の予防や拡大の防止に向けた体制づくりを推進するとともに、医療機関を受診することが困難な方に対する訪問診療やオンライン診療を促進します。
44. 高齢者施設などにおける感染性胃腸炎、インフルエンザなどの集団感染については、発生時に早期終息を図るため、発生の早期探知、施設での対策への助言を行います。また、施設職員への研修、感染症発生動向のメール配信、出前講座等を実施し、施設内の体制整備を支援します。

③ 京都丹波の豊かな自然環境を保全します。

45. 天然記念物であるアユモドキをはじめ多くの生物の生息環境の保全・再生等を、市町やN P O等地域活動団体、住民等との協働により推進します。
46. 京都丹波高原国定公園の中核となる南丹市美山町の「芦生の森」について、猟友会など地元関係者、京都大学、南丹市と連携し、地域の合意形成に基づいた有害鳥獣捕獲や植生回復に向けた活動を実施します。
47. 森林所有者や地域住民、林業事業体、緑の少年団、企業、大学、市町等多様な主体が連携し、里山を中心に、「京都モデルフォレスト運動」を推進し、森の恵みを受けている府民みんなで京都丹波の森を守り育てます。
48. 里山において、企業と連携し、放置竹林の整備を進めるとともに、伐採竹を資源として有効活用する新たな環境ビジネスモデルの構築に取り組みます。
49. 「木づかいネットワーク」を中心とした「京都丹波木づかい運動」などの地域産材利用拡大の取組や府内産木材を活用した木材利用コンクール（もくもくコンクール）など木育・森林環境教育の取組を進め、森林整備の必要性と木材利用の意義を発信します。
50. 持続可能な社会の創り手を育成するため、産学公民連携による環境教育に取り組み、小学生を対象に地域のシンボルを活用して自然環境やS D G sについて学ぶ体験型環境学習を推進するとともに、小学校の授業と関連づけた効果的な環境学習を提供します。
51. 海洋ごみの原因となるプラスチックごみをはじめとしたごみの削減を図るため、市町と連携し、代替プラスチック製品の利用や3 Rの取組の普及・啓発を推進します。

④ 農畜産業の持続的な発展による、食料の安定供給を確保します。

52. 環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律（みどりの食料システム法）に基づき、有機農業や京都こだわり生産認証システム・I C Tなどの農業技術の普及促進や、産業支援機関と連携した販路開拓支援など環境負荷の低減に資する生産活動を促進します。（再掲）
53. 担い手が不足し今後の営農が危ぶまれる地域農業の維持・発展のため、集落営農組織や農企業者等が取り組む加工・販売や法人化の支援を進めるとともに、複数集落間の営農体制の組

織化や就業者の育成・確保を支援します。（再掲）

54. 畜産・耕種農家からなる「飼料用米生産利用推進研究会」などの耕畜連携を支援するため、畜産センター、農業改良普及センター及び農林センターが連携して、飼料用米やWCS等の低コスト・多収栽培の研究・普及拡大に取り組むとともに、良質な堆肥を供給し、資源循環型の農業を促進します。（再掲）

4 京都丹波の強みを生かす「横断プロジェクト」

各分野に記載している具体的施策を、京都丹波の強みである「食」、「自然・歴史文化」、「スポーツ」という三つの視点から再編した「横断プロジェクト」を設定しました。

これらの「プロジェクト」の実施に当たっては、地域住民や市町、NPO等地域活動団体、企業、有識者等に参画いただき、オール京都丹波で施策を展開し、より効果的で広がりのある取組を行います。

(1) 京都丹波『食』プロジェクト

『食』は、人間の生命の維持に欠くことができないものであり、かつ、健康で充実した生活の基礎として重要なものです。

また、『食』には、人を惹きつける魅力があり、癒しを求めて農業や農村生活体験に参加する人も多くいます。京都丹波のいちおし食材をブラッシュアップし観光等の取組に生かすことで、さらなる誘客につなげていくことができます。

さらに、食育や地産地消を推進することにより、子どもたちの健全な心と身体が培われるとともに、地域への愛着や誇りが生まれ、豊かな人間性が育まれます。

このほか、様々な施策を『食』を切り口にして取り組むことで、より相乗効果の発揮が期待されます。

(2) 京都丹波『自然・歴史文化』プロジェクト

『自然・歴史文化』は、人々に感動と希望をもたらし、豊かな人間性や創造性を育むものであり、また、地域への愛着を生み、誇りを高め、人々の社会生活になくてはならないものです。

京都丹波の豊かな『自然』や伝統ある『歴史文化』は、保全・保存しながら、周遊・滞在型観光の対象や、移住・定住を希望する若者を惹きつける魅力として活用できます。

また、次世代に引き継いでいくことにより、地域への理解を深め、若者の郷土愛を醸成していくことにもつながります。

さらに、京都丹波産商品を京都丹波の歴史や文化に結び付けてブランド化することにより、更なる生産振興や誘客につなげていくことができます。

このほか、様々な施策を『自然・歴史文化』を切り口にして取り組むことで、より相乗効果の発揮が期待されます。

(3) 京都丹波『スポーツ』プロジェクト

『スポーツ』は、世界共通の人類の文化であり、生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠なものです。

また、多くの参加者が集まる『スポーツ』大会の開催は、地域での受入体制づくりや、地域の賑わいづくりや活性化につながります。

京都スタジアムは、単にスポーツ施設としてだけではなく、周遊・滞在型観光の拠点として活用することが期待されます。

さらに、京都トレーニングセンターなど特色あるスポーツ施設を活用することにより、トップアスリートを育成するとともに、府民の体力づくりや健康増進にも生かすことが望まれます。

このほか、スポーツの関連企業の集積や研究の促進など、様々な施策を『スポーツ』を切り口にして取り組むことで、より相乗効果の発揮が期待されます。

5 広域連携プロジェクト（エリア版）

○南丹地域スポーツ&ウェルネス&ニューライフ広域連携プロジェクト

京都スタジアムや京都トレーニングセンター等との連携を進め、地域の豊かな自然も生かした日本有数のスポーツ健康エリアとしての基盤を生かし、地域の各大学とも協働したスポーツ&ウェルネスの産学公実証を核にした地域づくりを進めます。

また、産業拠点や大学が地域に集積するとともに、自然や食も豊富である地域が隣接することを生かし、双方の良さを取り込んだ生活ができる地域の実現を目指します。

【主要な方策】

- スポーツ、食や癒やしによる健康長寿づくりの先進モデル地域づくり
- 産学公連携によるスポーツ&ウェルネスの実現に向けた実証と人材育成
- スポーツ&ウェルネス、フードテック産業などクロス産業集積エリアの創出
- 都市生活と田園生活がそれぞれ味わえる生活圏の創造

南丹地域振興計画の数値目標

(1) 京都丹波の地域資源を生かした観光や移住・定住の推進による 交流・活力のまちづくり

指標名称	単位	基準値 (2021年度)	目標数値 (2026年度)
1 管内観光消費額単価	円	1,473	1,700
2 京都丹波に関わるSNS投稿数(累計)	件	4,410	130,000
3 管内への移住者数(累計)	人	750	2000 (2022~2026年)

(2) 人権が尊重され、子育てしやすく、誰もが希望を持って元気に 暮らせる地域づくり

指標名称	単位	基準値 (2021年度)	目標数値 (2026年度)
4 きょうと子育て応援施設数(累計)	件	61 (2022年7月)	100
5 京都丹波子育て応援隊企業数及び京都丹波Uターン応援隊企業数 (累計)	社	57	100
6 人権に関する啓発活動の取組回数	回	52	76
7 障害者の一般就労者数(累計)	人	161	346
8 健康増進の取組への参加者数	人	4,800	7,800

(3) 明日の京都丹波産業を担う人づくり

指標名称	単位	基準値 (2021年度)	目標数値 (2026年度)
9 経営革新を志向する企業経営者数(累計)	人	641	1,260
10 年間販売額が1億円を超える農業法人等の数(累計)	経営体	25	31

南丹地域振興計画に掲げた取組について、その進捗を客観的に評価するため、以下のとおり計画の最終年度（2026年度）における数値目標を設定します。

※目標数値として各種の調査を活用していますが、調査によっては毎年行われないものがあることから、数値目標の設定については、2026年度以外となる場合があります。

※他の計画に位置付けられた数値目標を本計画において設定しているものについては、他の計画期間の満了等によりその計画が改定された場合は、改訂後の計画で位置付けられた数値目標に置き換えるものとします。

目標設定の考え方	出典	参考年間目標	関連方策
毎年3%ずつ増加させ、2026年度に基準値の15%増加をめざす	京都府観光入込客調査（京都府）	2023年度：1,570 2024年度：1,610 2025年度：1,650 2026年度：1,700	ア、イ
毎年30,000件ずつ増加させ、2026年度に130,000件をめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度：35,807 2024年度：67,205 2025年度：98,602 2026年度：130,000	ア
2022年度から2026年度の間に2,000人の増加をめざす	京都府政策企画部、農林水産部による実態把握	2023年度：650 2024年度：1,050 2025年度：1,500 2026年度：2,000	ウ

目標設定の考え方	出典	参考年間目標	関連方策
2026年度に100件をめざす	京都府健康福祉部、南丹広域振興局による実態把握	2023年度：73 2024年度：82 2025年度：91 2026年度：100	ア
毎年約10社ずつ増加させ、2026年度に100社をめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度：77 2024年度：87 2025年度：94 2026年度：100	ア
毎年4回ずつ増加させ、2026年度に基準値の1.5倍の活動量をめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度：64 2024年度：68 2025年度：72 2026年度：76	ア
2026年度に約350人をめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度：235 2024年度：272 2025年度：309 2026年度：346	ア
毎年600人ずつ増加させ、2026年度に7,800人をめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度：6,000 2024年度：6,600 2025年度：7,200 2026年度：7,800	イ

目標設定の考え方	出典	参考年間目標	関連方策
年間の企業訪問件数の約350件の4割にあたる約140人をめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度：840 2024年度：980 2025年度：1,120 2026年度：1,260	ア
年1経営体ずつ増加させることをめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度：28 2024年度：29 2025年度：30 2026年度：31	ア

	指標名称	単位	基準値 (2021年度)	目標数値 (2026年度)
11	管内の製造品出荷額等	億円	3,626 (2019～2020年平均)	3,810
12	管内の農畜産業産出額	億円	155 (2016～2020年の最大 と最小を除いた3カ年 平均)	160
13	地域産木材（素材）生産量	m ³	65,000 (暫定値)	77,500

（４）交流と安心・安全の基盤づくり

	指標名称	単位	基準値 (2021年度)	目標数値 (2026年度)
14	河川整備計画策定済み河川の改修延長（累計）	km	4.7	8.0
15	対策を講じた防災重点ため池数（累計）	箇所	126	219
16	自主防災組織タイムライン策定数（累計）	件	10	40

目標設定の考え方	出典	参考年間目標	関連方策
2026年度に基準値の5%増加をめざす	工業統計調査（経済産業省）	2023年度:3,695 2024年度:3,730 2025年度:3,770 2026年度:3,810	イ
毎年1億円の増加をめざす	「市町村別農業産出額（推計）」（農林水産省）	2023年度:157 2024年度:158 2025年度:159 2026年度:160	ウ
毎年2,500㎡ずつ増加させ、2026年度に伸び率1.2倍とすることをめざす	京都府農林水産部による実態把握	2023年度:70,000 2024年度:72,500 2025年度:75,000 2026年度:77,500	ウ

目標設定の考え方	出典	参考年間目標	関連方策
過去の整備実績値を踏まえ、2026年度に8kmをめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度:5.6 2024年度:7.4 2025年度:7.7 2026年度:8.0	イ
毎年5箇所ずつ増加させ、2026年度には全防災重点ため池219箇所をめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度:205 2024年度:210 2025年度:215 2026年度:219	イ
毎年、各市町2組織ずつ策定し、2026年度に40件をめざす	南丹広域振興局による実態把握	2023年度:22 2024年度:28 2025年度:34 2026年度:40	イ

